
放課後想唄

羅々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後想唄

【Nコード】

N7187A

【作者名】

羅々

【あらすじ】

放課後、孤独な少女は、夕陽と佇み、毎日を過ごしていた。それがいつもの事で、それ以上の事を望んではいなかった。

考察

夕陽に照らされて伸びる影。

すべてが夕陽色に染まっていた。

そして、キミがいた。中学二年の夏。よく考えると、この一秒さえ今しか過ごせないんだ。面倒臭い、国語の授業さえ、眠くなる数学の授業さえ、懐かしく思う日がいつか来る。

考察（後書き）

下手ですいません（^ー^；）更新、遅くなりますが、どうかよろしくデス！！！！

孤独のテンポ

神山栗音（13）合唱部所属。週3しか練習が無かった彼女は、毎日暇していた。特に放課後は、友達もみんな部活で、ただ夕暮れが寂しく沈んで行くだけだった。

栗音はこんな暇な時間が嫌いでは無かった。夕暮れに浸り、一人で広い教室を独り占め。時に今日の分の宿題をしていた。日直であれば日誌を書いたし、宿題が出来れば隠し持っていた少女漫画を読んだ。栗音の家は母子家庭であり、そして一人っ子で7時まで母親が迎えに来ない。ただ、父親や、裕福を求めて無い栗音は、不満など言うことは無かった。今日、宿題も出来て、そして漫画を読み、満足した栗音は、男子バスケット部が廊下を走っているのを横目で、ただ歩きたいといった様子で、トボトボと歩きはじめていた。

窓から覗かす夕陽はもう時期完全に沈みそうだった。バスケット部が去った廊下は静けさを保ったまま、栗音を孤独に誘った。それを振り切ろうと、栗音は靴音で統一性の無いステップを刻んでいた。今まで足下をずっと見て来た気がした。空が青いことを忘れていた気がする。ふと、何の意味も無く足下から目を反らした。ボロくなつた靴は醜い物だった。孤独なテンポはやがて止まり、廊下に静けさが戻った。時折、どこかの教室の、窓が開いているのか、風が泣いた。教室のドアに近づき、時計に目をやった。気付いた頃には7時を過ぎていた。

「お母さん、迎えに来てる力モ。」

誰に言う訳でも無いその独り言は、行き場無くして廊下で響いた。栗音は教室に戻り、机に上がっている鞆に手を通した。背負ってみて、溜め息をつく。

「バイバイ。」

靴音が響いていた。

蝉

湿った空気が頬をなでた。相変わらず蝉の声が耳を痛くする。

何処からかピアノの音色が蝉を遮り、私の耳に集中させた。

感想は、ただうまいな。ピアノは嫌いでは無かった。それ故に、誘われた。

持っていたキンキンに冷えた缶ジュースが、手の平だけ、体温を奪った。缶に付いた水滴が、乾き暑くなったアスファルトに落ちて行った。それと同時にピアノの音色が耳に途絶えた。面白みが無い蝉の声がまた、耳に入る。

ふと、日光により額が汗ばんだ。故に伝って行った。

暑い。五月蠅い。の思考しか思い付かなかった。ただ、家に帰ってもクーラーが無いため体感温度は変わらないだろう。だけどたまらなく、蝉の声から逃げるように走っていた。無意識と言っのだろうか。

家の玄関で立ち止まり、膝に手を付いた。

しゃがみ込んだが、膝裏の汗が嫌で、そのままの状態で軽く屈伸をした。

玄関は日陰になっていた。日なたよりは涼しいと考えたからだ。視線を庭に移した。丸い影の少し先にバスケットボールがあった。あれは初めて誕生日に買ってもらった物。だいぶ昔の産物で、いろいろな所から糸状の何かが出ている。昔、大好きだったバスケット。今は正直、好きかどうか何て分からない。それでも、近付いてみる。長く放置にあったボールは、姿からその年月が見て取れるようだった。両手で挟み、自分の目の高さに上げてみる。ボールのわきから覗く太陽は、知っていたけど眩しかった。夏はこんなに騒がしい季節だったのか。そう悟った。

バスケットリンク

木のベンチが湿った。缶の周りはビショビショだった。

フェンスで区切られた道路とバスケットリンク。至ってシンプルな構造の子供の遊び場。そこに栗音がいた。

見ると、ノースリーブでボールをドリブルしていた。

少しリングから離れた所に栗音がいて、足を構えていた。蝉の声が応援してる様に、その大きさを増す。暑さもまた、蝉の声に比例して……。栗音は足を構えつつも、依然として進もうとしない。まるで何かをためらっている様だ。

「バスケ???」

栗音は背に誰かの声を感じ、性格通り、ゆっくりと振り返る。栗音には蝉の声のせいで聞き取れていない様だ。

栗音の背に届いた声の持ち主は、栗音と同じくらい幼い顔をした少年だった。

少年は、半袖シャツに、半ズボンと、安易な格好でそこにいた。

栗音の表情から、少年は、自身の声が聞こえてなかったと悟った。空気が波動を起こし、少年の口から大きい声が出た。

「バスケしてんの？」

栗音の耳は蝉の声をかき分けて、少年の声を拾う。

問いただされ、返すのが言葉であり、それ故栗音は少年に言う。

「うん。」目線は少年の顔の、僅か横に行っている。
「バスケ好き？」

異性からの言葉として、

「好き」

という単語に過剰反応してしまい、動揺する。

「いや、別に。」

動揺しながらも、栗音は返答する。

少年は聞いて、何度か頷いて、ベンチに座った。少年の横には、栗音の缶ジュースがある。

まだ（前書き）

少年、海江田雄夜^{かいえだゆうや}

まだ

少年は名を「雄夜」（ゆうや）と言った。特に、名前を聞いたわけでもなく、ただ自己紹介のつもりなんだろう。

栗音はそれを望んだわけではない。

「君の名は何て言うの？」

唐突に聞かれ、何秒か栗音は、ただ口を開けて呆然としていた。

正気に戻ったのか小さいながらも、自分の名を述べた。

「栗音。」

ただ一言だけの、その呆気なさに雄夜と言う少年は、ただ頷くだけだった。

栗音は正直、一人で居たい、と思う人間で、あっちに行って欲しいとつつに願っていた。

「シュートはしないの？」

少年は聞いた。

「私下手だから、やっても無駄だと思う。」

栗音は返した。

栗音らしいと言うか、少年は聞いて、不可解そうな顔をする。

「俺が教えようか？」

栗音は、きつとこの手の人が、嫌いだ。

これは推測に過ぎないが、現に栗音の顔を見れば分かる事だ。蝉が代わり、返すように鳴き続ける。栗音は少年から目をそらした。

「ちよつとそのボール貸してみ？」

少年雄夜はそう言つて、栗音に手を差し出した。

栗音は仕方なしにボールをバウンドさせて少年側に投げる。

少年は依然として栗音の顔を見たまま、キャッチした。

足が構えられ、そしてスナップをきかせ走った。

わずからメートルと言つリンクとの差が、疾走によつて埋められた。一瞬の事のようなだった。

少年の右手が、ボールを押し出すように、ネットへとシュートする。わずか数秒。ボールはネットをすり抜けた。

「凄いね。」

栗音はまるで、興味がなさそうにそう呟いた。少年に、聞こえたかどうか、それさえも分からなかった。

「ほいよ」

少年は両手の人差し指でボールを押し、栗音へとパスした。

栗音は無関心にボールを受け取り、少年を見た。

少年雄夜は何も言わなかったが、その瞳に、「やってみな？」の文字が浮かんだような気がする。

栗音は少年の肩に目をやり、しばらくしてリンクの方を見た。

「決まるよ。シュート。」

倒置法の言葉を投げかけた少年の声は、確かに栗音が受け取った。背の低い栗音は、ネットへと一心に飛び跳ねた。

「決めるよ。」

そう言つて、栗音はボールを飛ばした。

ボールはリングを回り、そしてネットへと入った。

「入った！」

栗音にとって、これがバスケットでの初めての喜びだった。

「やったじゃん！」

少年は拍手しながらそう一緒に喜んでくれた。

栗音が地を見て、喜び、少年の方へ顔を向けた。

だが、少年の姿はなく、あるのは蝉の声と、生ぬるい風だった。

ベンチへと駆け寄った。さっきまで少年が座っていた。

だが温もりなどは無く、ただ残り香、と、水浸しの缶ジュースがあるだけだった。

蝉が唄う。

まだ（後書き）

すいません下手で（ ; ; ）

違い

夕陽が差した。影が伸びた。蝉が鳴いた。

夏の風景。そこに、私がいた。

あれから、雄夜と言う少年は、姿を現さない。故に、顔を忘れかけている。

もう一度、会いたい。そんな願いを無視するように、神は意地悪だった。

でも、そんなこの世に慣れてしまった。と、悟った。

響き渡る物があつた。それが何なのかは知らない。

それより、あの少年は、今どうしているんだろうか。

残像、だったのだろうか。

「存在しないのか。」

廊下に、ただ虚しく響いただけだった。

「どうしたの？」

廊下に、もう一つ、響いた気がした。

私はその声に聞き覚えがあるような気がして、そして期待した。

後ろにふり返る。が、そこにいたのはあの時の少年ではなかった。

私の背を、はるかに上回り、そして、声も大分、低くなっていた。

「あの時の・・・」

少し裏返ってしまった私の声に、返答こそ無かったが、それでも、私の胸の内に何かが広がった。

「久しぶり。バスケットはその後どう？」

バスケットに、興味が無い私は、あの時だけ少しだけバスケットが好きだった。

それも、この少年のせいかも知れない。

「何度かシュートしたら、何度か入ったよ。」

何度が、この曖昧な言葉は、私がよく使う言葉で。

「そっか。良かったよ。」

「ところで、君はバスケ部なの？」

「うん。バスケ部。だから正直、栗音の言ったことが気に入らなかったんだ。」

いきなりの呼び捨ては、男子が大抵そうであるから、もう慣れっこだった。

あの時の言葉、思い出してみると何か気に障る事を言った気がする。

あの時の少年が、不可解な顔をしたときのように。

「でも君はさ、バスケ部のように廊下を走ったりしないんだね。」

私は放課後、憂鬱に枯れながら夕陽と過ごしている。

そして、決まって男子バスケ部が廊下を走っている。

だが私の脳裏に、少年の顔など無かった。

「ちょっと走るのが面倒くさくて。」

「・・・そう。」

雄夜がそう言った。でも私は理解し難い事だったような気がする。

「走るのが、面倒、くさい、んだね。」

「何強調してんの?」

私はわざと強調性を建ててそう言い放った。

少年は不審に思っただろうか。

「ごめん。私、きっと迎え来てると思う。だから、また今度ね。」

「そっか。また、ね。」

私は手を小さく振り、少年の隣を通って背を向け合う。

少年も前進し、廊下に二人の靴音が響いた。

影が離れ、そして夕陽が云う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7187a/>

放課後想唄

2010年12月18日14時28分発行